

用字変遷より見たる古代「えみし」についての一考察

女 鹿 潤 哉

はじめに

古代史上の「えみし」をめぐることは、今なお多くの研究課題が残されている。筆者はかつて高等学校社会科（現在では地歴科）教諭としての授業実践の立場から二つの小論に私見を述べたことがある。^①未熟にして考察も甘く、赤面の極みである。部活動の指導や受験生を対象とした進学・教科指導など、休日返上もしばしばな校務や、生来の怠惰を以て先行諸研究に学ぶ機会のないまま、蠅螂の斧をふるったに過ぎなかったと反省している。

現在奇遇にして、教壇を離れて社会教育機関に身をおくこととなった。多忙な中にも、かかる問題について考える若干の時間を得たことで、先行研究に拠りながら過去の小論に大きく加筆・修正を施し、古代「えみし」から中・近世「えぞ」への連なり、それらとアイヌとの関係などを少しく論ずることができた。^②尤も、積年の不勉強は如何ともし難く、決して満足のものとはなっていない。

本小論は、今日まで一連の拙稿によって得られた理解をもとに、「えみし」に対する用字（漢字表記）の変遷をおいながら、用字と訓（呼

称）及び認識（概念）との相関などについて論ずるものである。こうした試みは、かつて研究ノートの短文の中に略述した所であるが、^③今回はそれをさらに深めることをめざす。

なお、本小論は古代史上に蝦夷などとみえる、東北地方などの人々について、原則として人間集団を問題とする場合は「えみし」を、訓や認識についてはエミシ・エビスなどに表記する。史料からの引用や用字には、蝦夷・蝦蟇・夷・俘囚などの漢字表記を用い、特に注意を喚起した場合には、適宜「」を付すものとする。また、「えぞ」についても、同様にエゾ、蝦子・蝦夷などに表記する。

一 「えみし」の文化的系統

（一）海峡をはさむ共通文化圏

「えみし」になされた用字、及び呼称と認識について考察する上で、「えみし」、さらには「えぞ」の実体についての理解は重要であると思われる。ここでは、主として最近執筆した拙稿^④によって得られた成果に拠って論を進めたい。紙数の関係で論拠について詳述しきれない所も

あるので、右拙稿をご笑覧の上ご叱正賜りたい。

国史上のエミシ関連記事が実録的となっていく画期をなす斉明朝前後（七世紀後半）、畿内政権は「えみし」の居住域について、国史の記述から概ね日本海側は新潟県北と山形県以北、太平洋側は仙台平野以北から南西部北海道（渡島蝦夷）までは把握していたと考えられる。即ち、七世紀の「えみし」は、津軽海峡をはさんで東北北半と新潟県北から北海道方面にかけて居住していたのである。

東北地方の北半と南半とは縄文時代早期以降、それぞれ長期間にわたって文化圏を異にしてきた。北海道の文化もまた、ほぼ石狩低地帯などをはさんで西部と北東部とでは顕著な差異がみられる。このうち東北北半と南西部北海道、特におよそ秋田市と田沢湖、盛岡市と宮古市を結ぶ線以北の北部東北と道南とは、長きにわたって密接な関係を保ち、共通の文化圏を形成してきたと考えられる。この津軽海峡をはさんで存在した文化圏は、時期によって南北に多少拡張するものであった。

また、東北北半には、アイヌ語に由来すると考えられる地名（以下アイヌ語地名）が濃厚に存在していることが知られており、この事実はい日のアイヌ語に極めて近い言語を有する人々が、北部東北に長く居住していたことを意味している。そのことと既述考古学上の知見から、およそ東北北半から南西部北海道にかけての集団は、縄文時代以来言語を始めとして同系の文化を有してきたと理解することができる。

古墳時代前期～終末期のおよそ四～七世紀頃、北海道のほぼ全域に展開した続縄文文化後北C¹式土器に後続する、C²・D式土器、北大Ⅲ式土器などの北海道系土器は東北北半では相当数発見されており、特に

後北C²・D式土器は東北六県と新潟県にまで及んでいる。また、東北北半の土墳墓や末期古墳などからは、北海道後北C²・D～北大式期に特徴的な黒曜石製ラウンドスクレーパーやその剥片が出土している。⁽⁶⁾

東北北半におけるこれら北海道系要素がみとめられる遺跡では、葬送などの北海道系要素も、おしなべて重層的に受容される傾向がみてとれる。

確かに、北海道系要素が重層的に検出される遺跡は、東北北半の遺跡全体からみれば一部にしか過ぎないから、このことについて、例えば北海道方面からの人の移動に求めようとする理解も生じよう。しかし、人の移動のみを以てこのことを説明することは極めて困難なのである。即ち、東北北半における片口土器、鋸歯状・連続山形状の沈線や頸部に段をもつ土師器は、北海道北大Ⅲ式土器などの影響によって成立したものとみられるが、これらは量も比較的多く、地元で生産されたものとみられることから在地系集団によるものと考えられる。やはり一連の北海道系要素も同様に、東北北半の在地系集団が受容したものであり、搬入や人の移動のみによる解釈は困難である。

また、東北地方におけるこうした沈線をもつ土器は七世紀の中に収まり、⁽⁸⁾それらに深く関与した北大Ⅲ式土器は、北海道の初期擦文土器とみなされることから、⁽⁹⁾続縄文文化に後続する初期擦文文化の影響も、東北北半に継続的に及んでいるものとも理解される。東北北半の末期古墳などからは、錫製耳輪や腕輪などの装身具が出土しているが、⁽¹⁰⁾大陸起源とされる錫を銅などの合金ではなく、単独に用いるのは北海道擦文期の特色とされることから、⁽¹¹⁾東北北半の一連の錫製品が北海道方面の集団によって伝えられた可能性は高い。

北上川支流和賀川北岸の五条丸古墳の構造や副葬品などから、末期古墳被葬者の戸主（家父長）の性格が指摘されている。また、北上川流域の今泉・善性遺跡などから出土する伝世品とみられる遺物は、末期古墳の副葬品に共通するものがあることもこれを裏付けている⁽¹⁴⁾。従って、少なくとも北上川流域の末期古墳の被葬者は、戸主層を中心とした在地集団と理解できる。当時、東北北半の在地系集団は「えみし」であるが、国史をみる限り北上川流域和賀地方と、それ以北の「えみし」とが本質的に異なるものとは思われない。

以上のことから、東北北半などにおいて末期古墳を造営し、一連の北海道系要素を受容したのは「えみし」だったことは明らかである。

東北北半の文化も、南西部北海道に影響を与えている。例えば、擦文文化の形成には、本州の土師器に伴う文化が深く関与していることは諸説ほぼ一致している。とすれば、それには東北北半の「えみし」が関与したと考える⁽¹⁵⁾。また、擦文期前半の石狩低地帯には北海道式古墳と称されるものが出現するが、その構造などには東北北半のものと一連の共通性がみとめられ⁽¹⁶⁾、それは在地系集団が主体的に造営したもので、農具などの副葬品から擦文文化の成立を象徴するものとみなされる⁽¹⁷⁾。さらに、東北北半の末期古墳にしばしば伴う蕨手刀のある種⁽¹⁸⁾のものは、明らかに北部東北から北海道にもたらされたものである。国史上の「えみし」は南西部北海道にまでわたっているから、北海道式古墳を造営し、蕨手刀を入手した人々も「えみし」であったと理解できる。

東北北半では北海道系土器、その器形や文様を取り入れ、利器が石器から鉄器に置換した後も黒曜石を用い、同様に南西部北海道側も東北北

半から土師器や末期古墳などを受容しているという事実は、津軽海峡をはさむ南北に共通の価値観が存在したことを端的に示している。古代において、縄文時代以来の海峡をはさむ共通文化圏を維持した集団の主体は「えみし」であったと考えてよいだろう。

(二)「えみし」の実体

東北北半にはアイヌ語地名が顕著であるし、山間の狩猟集団マタギ山ことばの中にはアイヌ語に共通する語彙が存在している。このことも、東北北半にアイヌ語系の言語を有する人々が存在したことを示している。すると、津軽海峡をはさむ共通文化圏では、アイヌ語系言語を共有していた可能性が高い。国史上の「えみし」の言語は、古代国語方言などとはみなし得ない程に、当時の中央のことばとは本質的に異なっていた⁽¹⁹⁾。『続日本紀』養老六年夏四月十六日、『日本後紀』延暦十八年二月二日、『日本三代実録』元慶五年五月三日、『藤原保則伝』などことは明らかである。

古代この地域に居住していた集団の主体は「えみし」だったと考えられるから、北海道と価値観を共有した「えみし」は、今日のアイヌ語に連なる言語を有していたと理解すべきであろう。北海道の文化は南西部と北東部とに二分され、南西部（「えみし」）の言語はアイヌ語系であったと考えられるが、北東部の集団の言語はどうか。今日の知見ではアイヌ語地名は全道にわたっており、北海道には日本語とアイヌ語以外の地名はみあたらないとされるから、北東部の集団の言語もアイヌ語系だったと考えるべきである。

後北C₁式期以降、南西部北海道から東北北半にわたった共通文化圏は、従来のわくを超えて北東部の集団を巻き込む形で全道へ、さらには南部樺太や南部千島などにまで及んだ。こうした文化圏拡大のエネルギ―こそは、これらの地域が一つの文化圏にまとまろうとする指向性を示すものであり、それは次代の擦文文化を経て成立するアイヌ文化形成への先駆的な動きとしてとらえられる。とすれば、拡大文化圏形成の背景には北東部北海道の集団は言語を始とした文化系統上、「えみし」に近いということがあったと考えられる。擦文文化は全道に及んでいるし、アイヌ文化が形成されたとされる十二世紀頃までの北海道に、大陸などから大量の人の移動がなされた形跡はなく、アイヌ語に由来する地名も全道に及んでいるから、北海道擦文期の人間集団が北海道のアイヌに連なるもので、彼らがアイヌ文化を形成したことは疑いようがない。

南西部北海道などで出土する「舂」字墨書土器は、国史上の秋田城などでの渡島蝦夷襲応記事などとの関連が指摘されており、国家と「えみし」⁽²⁰⁾との密接な交流があったことを示すものとみなされる。東北北半地域は、南西部北海道と密接な交流をもちながら縄縄文文化の諸要素を共有する一方、土師器などに象徴される本州文化を伝えることで、次代擦文文化の形成に大きな影響を及ぼした。後北C₁式期―擦文期の一連の動きは畿内政権が律令国家へと変貌を遂げ、さらにその後の王朝国家への移行など、日本国家の政治的動向とも密接にかかわっていると思われる。即ち、それは南からの和人勢力の進出に対抗する性格をもち、和人との交流と抗争の中で生じた危機感を背景とするものとみられる。⁽²¹⁾

律令国家による征夷とそれに伴う和人の植民化政策以上に、「えみし」

側からの公民化要求の高まりから、東北北半の「えみし」の大半はやがて和人に同化していったと考えられる。従って、東北北半から南西部北海道の「えみし」はアイヌの祖先集団の一部、及び後世のアイヌには連なることはなかった、アイヌの祖先集団と同系の人々から構成されていたと規定せられるのである。

(三)「えみし」の系統の「えぞ」への連なり

擦文期の海峡をはさむ共通文化圏は本州側で縮小しているが、これは既述のような「えみし」の内民化によるもので、「えみし」の地域が北に押し上げられた結果であった。こうして律令国家統治の限界として残された東北北辺以北の地域は、中世的異民族概念エゾを成立せしめる舞台となった。即ち、王朝国家が俘囚と領域外の東北北辺以北の集団をエビスに一括して認識していた平安時代後半に、内民化して久しい俘囚勢力(エビス)は、東北北辺以北の地域をエゾと称するようになったと理解できるのである。⁽²²⁾これに遅れて中央では、平安末期に律令国家期にエビスなどと称された「えみし」の系統のうち、国家領域外の東北北辺以北の集団をエゾと呼称(認識)するようになったと考えられる。エゾは、王朝国家期以降に成立した中世的異民族概念と規定し得るものであり、エミシやエビスとは概念上異質なものであるが、人間集団としての「えみし」と「えぞ」とは系統上連なりをもつものだったのである。

「えぞ」が住んだ東北北辺以北は、擦文土器が展開した地域とほぼ重なっている。九世紀―十世紀中葉の青森県下にみられる擦文土器は在地系のものとともに北海道からの搬入品もあるが、土師器との差異が明瞭

となり、やがて秋田県米代川上流域にも及ぶようになる⁽²⁴⁾。また、十世紀中葉―十一世紀には、擦文土器に共伴する把手付土器や内面黒色処理壺、蒸籠形甗が定着し、ミニチュア様小型土器が増加するなど、青森県を中心とする北部東北の独自性が強まるとされる。これは北海道擦文文化がオホーツク文化を同化する過程で、北方的性格を強めたことに連動するものと理解される。

北部東北の独自性が強まる十世紀後半―十一世紀の頃、北部東北から道南などに高所や急峻な立地、環濠をもつなど防衛的性格の強い集落（以下防衛性集落）が形成される。こうした防衛性集落は、弥生時代西日本などにおけると同様、北部東北から道南などの地域が一連の緊張下にあったことを物語るものと理解できるが、その多くはほぼ奥六郡と山北三郡以北に形成されている。安倍氏は厨川柵を最後の戦場として滅び、一族の正任や良昭が清原氏の本拠地である出羽に逃れていることから、安倍氏は奥六郡以北を支配下においてはなかったとみられる⁽²⁵⁾。同様に、その当時の清原氏も山北三郡の北を支配下においてはなかったであろう。このことから、一連の緊張を生起せしめたものは「えぞ」社会内部の対立とともに、王朝国家側の俘囚勢力と「えぞ」勢力との対峙にも求められそうである⁽²⁷⁾。厨川柵が安倍氏側の北に対する防衛の拠点とみられることも、私見を傍証するものである。

また、防衛性集落のうちで秋田・岩手両県のものは県央以北に見られ、高所や急峻な立地に小規模に点在するものが多いのに対して、上北型と津軽型に分類されるとされる青森県のものはおしなべて規模も大きく、数も多いようである⁽²⁸⁾。東北北辺以北に形成された中世アイヌ圏以南に

においても「えぞ」が点在していた可能性があるが、防衛性集落はこうした状況にも通じるものがあることから、一連の防衛性集落の分布は俘囚勢力の所謂エゾの集落として理解すべきものである⁽³⁰⁾。

北部東北の擦文土器分布圏を擦文文化圏に含めることには問題もあろうが、津軽平野から津軽半島、及び下北半島にかけての地域には擦文土器の出土する遺跡が顕著であり、擦文文化をアイヌ文化へと移行せしめた技術革新は、実は北部東北においてなされたものであった⁽³¹⁾。従って、アイヌ文化は北部東北に濫觴をなすものとさえいい得るし、近世津軽領や南部領の東北北辺には狩村が点在しており、狩はアイヌと呼び得る存在であった⁽³²⁾。アイヌ及びアイヌ文化は、北海道を中心に北は南部樺太や千島、南は津軽・下北地方などの広範囲に形成されたものと理解できる。

以上を要するに、アイヌ文化を形成したのは、十二世紀頃の東北北辺から北海道方面の「えぞ」であり、それはアイヌの祖先集団の一部、及びそれと同系の人々から構成されていた古代「えみし」の系統の末裔として理解すべきものである。

二 「えみし」以前のエミシ

『日本書紀』に「愛瀾詩を一人、百人、人は言へども手向ひもせず」〔神武天皇即位前紀冬十月戊午〕と見える。これがエミシなどの音を推定し得る最古かつ、唯一の例とされる。児島恭子氏は、この歌謡が五世紀初めに大和朝廷の東国平定に参加した久目部のものとするれば、

エミシは関東地方の住民となること、宝亀三（七七二）年の『歌経標式』が「愛瀾詩」の前に「於佐伽那流」の一句の欠落があるとしていることをあげ、筆者藤原浜成が「大和忍坂のエミシ」と歌うことに何ら疑念を感じていなかったことを指摘している。³⁵ 奈良時代末の都の識者には、かつてエミシが大和などにも存在したとする認識があったことを示すものである。

また、この歌謡のきつかけとなったのが、八十梟帥などと記された朝廷によって王化され、支配下におかれようとするものの討伐であり、愛瀾詩は東北・北海道はおろか、関東地方にすら関係するものではないとする指摘もある。³⁶ 神武天皇そのものが實在可能性に乏しく、その記事もおしなべて造作的であることから、愛瀾詩関連記事も史実とみなすことはできない。しかし、實在可能性に乏しい何代かの天皇の治績については、後世における歴史的事実を仮託したものとする解釈もあるから、³⁷ 愛瀾詩関連記事にはエミシに対する中央認識が反映されている可能性がある。即ち、エミシは一人で百人にも対するような屈強な仇敵を対象としていることである。

従って、愛瀾詩は本小論が問題としている、東北北半から北海道方面にかけて住んだ「えみし」に限定されるものではない。エミシは特定地域の人民にかかわらない一般的な用法で、中央の命に服さない勇猛な反抗者を意味するものであり、³⁸ その語源についても、東の勇者を意味する弓師ユミシに求める見解もある。³⁹ エミシが弓師に由来するか否かは筆者にはわからないが、蘇我蝦夷をはじめとしてエミシという名の人名が少なくないのは、エミシには毫も侮蔑の意味などなく、元来勇敢な

ことを意味する国語に由来するとする理解⁴⁰が妥当なように思われる。

一方、『古事記』には「爾に天皇、亦頻りに倭建命に詔す。東方十二道の荒ぶる神、伏はぬ人等を言向け、和らぎ平けて（中略）倭建命は悉に荒ぶる蝦夷等を言向け（後略）」「景行天皇条一一内は筆者による」と見える。「荒ぶる神」「伏はぬ人」の対句表現から、「荒ぶる」と「伏はぬ」とは同義に用いられているとみられ、「荒ぶる蝦夷」の表現から「荒ぶる」と同様、「伏はぬ」も「蝦夷」を定義づける概念（認識）となっていることは明らかである。「蝦夷」は「東方十二道」への遠征記事の中に記されており、畿内政権の支配に服さぬ東方の人々を広く指すものとみられ、やはり東北北半などの「えみし」に限定されるものともなっていないが、畿内から見れば東方に限定的に用いられている。

記紀景行天皇条もまた、おしなべて造作的な記事が多い。天皇自身の實在可能性に乏しいから、その子とされるヤマトタケルの實在も疑わしいものとなるが、その業績とされる記事には、後世雄略天皇や高市皇子の活動が反映されているとする見解が示されている。⁴¹ とすれば、例えば東北北半以北の「えみし」に限定される以前の、古代国家のエミシ認識を伝えている可能性もある。それは国家の支配に服さぬものというエミシ概念の典型的表現とみられ、後述する中華的国史観成立以前の中央認識を反映したものと理解したい。

元来エミシは地域を限定するものではなく、畿内などにも存在したが、やがて東国へ、さらに最終的には東北北半以北の「えみし」を対象とするものとなったとみられることから、エミシの地域は歴史的に北東方に移行していく傾向がみてとれる。エミシとされた人々の地域が、畿内政

権の北東方への版図拡張とともに移動していることは疑う余地がない。後述のように、それはエミシに用いられた最初の特定の用字と考えられる毛人が、中国古典の毛民に由来するもので、北東方の人々に対するものであったことから、毛人を採用した倭国（畿内政権）も、「伏はぬ」「荒ぶる」北東方の人々を対象に用いたことにより、エミシは北東方に限定されたと考えられる。

国史上のエミシ関連記事が、総じて史実に基づく実録的なものとなるのは天武・持統紀であり、崇峻・皇極紀などにも実録的な記事があるとされるものの、斉明紀が一大画期をなすものとされる。⁽⁴⁵⁾ 畿内政権は乙巳の変を契機として開始された大化改新後、律令に基づく中国的中央集権国家形成にむけた歩みを進めるのであるが、斉明朝は、まさに氏姓制社会から律令制社会への移行期の中にある。

この時期の国史に北東方の蝦夷や肅慎、南西方の隼人の内附記事が散見するのは、唐にならった中華帝国をめざす倭国の版図拡張政策を反映するものであり、その公記録にも中華観が少なからぬ影響を及ぼしたであろう。畿内政権の支配の及んだ地域にみられる前方後円墳や埴輪を伴うような古墳文化は、岩手県南部の角塚古墳などの特異な例を除くと、東北地方では太平洋側は仙台北方の大崎平野、⁽⁴⁶⁾ 日本海側では山形盆地が北限とされる。辻秀人氏によれば、三世紀後半～四世紀初め太平洋側では仙台北野や大崎平野まで、日本海側でも庄内平野、内陸部では山形盆地まで、北東部北陸、東海、関東などからの人の移住、或いはその強い影響のもとに古墳時代社会が成立する。それは初期大和王権の政治的動きにかかわるものとされる。⁽⁴⁷⁾

東北南半までは前期の段階において、中央と同様の前方後円墳が造営されるのに対して、北半には終に前方後円墳は進出できなかったのである。前方後円墳が、畿内政権の支配の及んだ地域に造営されたことは諸説一致しているから、東北北半以北には畿内政権の支配を拒否したものが存在したことをうかがわせ、それこそが「えみし」であったことはもはや疑いようがない。

既述のように、東北北半地域にはアイヌ語地名が濃厚に分布し、縄文時代以来南西部北海道と共通性の強い文化圏を構成してきており、古墳時代を通じて北海道系要素、及びその文化の影響が重層的に受容されている。東北北半における北海道系要素の展開は、畿内勢力が進出できなかったことと表裏の関係にあり、そこには畿内政権の支配に抵抗した「えみし」の存在があったのである。「えみし」がアイヌの祖先集団の一部、及びそれと同系の人々から構成されていたと考えれば、北海道系文化を何ら抵抗なく容易に受け入れたことも理解できる。

国造制が施行され、前方後円墳が継続的に築造された南部東北が体制内地域であるのに対して、それ以北を「えみし」の地と見なす見解に⁽⁴⁸⁾ 与したい。東北北半の「えみし」は後世アイヌ語の系統に連なる言語を有するなど、文化的に畿内政権支配下の人々（以下和人）と本質的に異なる所のない東北南半の人々とは、大きく異なっていたと理解できる。⁽⁴⁹⁾ 阿倍比羅夫北征記事に象徴されるように、国家が本格的に東北北半への進出を強めていけば、当然自分たちとは本質的に異なる「えみし」の存在を強く意識するようになり、国家側の記録は中華観による偏見を含みつつも、詳細かつ実録的になってくる。従って、斉明朝はエミシが東

北北半や北海道方面の集団に限定されていく上で、大きな画期をなす時期にあたっている。

後述のように、五世紀後半以降に求められる毛人の採用以前には、エミシは愛瀾詩という万葉仮名が示すように、固有の用字はなかったであろう。畿内政権が北東方の仇敵を毛人に表記した（エミシ＝毛人となった）時点で、その用字が中国伝統的な毛民に基づくものであったことが、エミシを北東方の集団に限定して用いる要因となったものと理解するものである。畿内政権が、主として東国や南部東北の本質的に和人と異なる所のない人々と、主として東北北半以北に居住したアイヌの祖先集団の一部、及びそれに同系の人々を主体とした「えみし」とを峻別していない段階では、エミシ＝「えみし」とはなっていない。

しかし、国史上のエミシは、結果として「えみし」に限定されている。斉明朝の頃にエミシ関連記事が実録的となる画期があるとすれば、実録的記載が以後の国史の基本的な在り方に連なると考えられるから、エミシが「えみし」に限定して用いられるようになったのは、ほぼ斉明朝の頃とみなすことも可能ではあるまいか。

北半部を中心とする東北地方や北海道にはアイヌ語地名が存在するが、神武歌謡のエミシが存在したかもしれない畿内大和や関東にアイヌ語地名が存在しない限り、エミシがアイヌ語 *enchu* の祖形 *enchin* など由来するという見解には従えない⁽⁴⁹⁾。また、国語のエミシとは別に、アイヌ語に由来するエミシがあった可能性を完全に否定することはできない⁽⁵⁰⁾が、神武紀歌謡のエミシは *enchu* に由来するものではないことは明らかである⁽⁵¹⁾。上代国語の中にエミシがあるのに、畿内政権が畿内などに

あった人々への呼称として、遙か北東方のアイヌ語系語彙に由来するエミシを用いたなどとはとうてい考え難いのである。

畿内の八十梟帥らのエミシは、今日の考古学上の知見からみても和人と本質的な差があったとは思われない。これに対して、「えみし」はアイヌ語系の言語を有するなど、アイヌの祖先集団の一部、及びそれと同系統の人々から構成されていたものと考えられる。それでも「えみし」と「えみし」以外のエミシに共通するものがあつた。即ち、それはともに畿内政権に敵対するものということであつた。

以上のことから、アイヌ語 *enchu* や *enchin* がエゾの語源をなす可能性⁽⁵²⁾までも否定するものではないが、エミシについては屈強な男子を意味する上代国語から出発し、最終的に東北北半から北海道方面の人々＝「えみし」に限定されたものと考えるべきである。今や、エミシはアイヌ語 *enchin* などに由来するものではないと明言すべき時期にきているのではないだろうか。

三 「えみし」と毛人表記

『上宮聖徳法王帝説』には「蘇我豊浦毛人大臣の兄入鹿□□林太郎、伊加留加宮に坐す山代大兄及び其の昆弟等十二王子等悉く之を滅ぼすなり。」「飛鳥（皇極）天皇癸卯（六四三）年十月十四日」と見え、七世紀前半の所謂蘇我蝦夷は蘇我毛人とも記されていた。また、『続日本紀』などの佐伯今毛人「延暦九（七九〇）年没」のように、奈良・平安時代には毛人が人名にもみられ、エミシに訓まれていたこともよく知られて

いる。そして、毛人が蝦蟇・蝦夷〔以下二つの用字を蝦蟇（夷）に表記〕に先行することも諸説一致している所である。

『宋書』の所謂武の上表文には「東に毛人を征すること五十五国」

「夷蛮伝倭国」と見え、くだって『旧唐書』にも「東界北界は大山有りて限を為し、山外は即ち毛人の国なり。」「東夷伝倭国・日本国」、『唐書』に「東北に大山を限て、山外には即ち毛人あり。」「東夷伝日本」、

『宋史』に「東北隅は大山を以て隔て、山外は即ち毛人の国なり。」「外国伝日本国」などと見えるのも、これに対応するものと思われる。高橋

富雄氏は、かつて毛人は五世紀以降、東方の夷民を中国風にいい表したものとしたが、近年毛人は本来毛野国人であり、広義に毛野氏管国の東国人を指すものとしている。⁽⁵³⁾ 高橋崇氏は『宋書』の毛人についてエミシに訓まれ、関東・南部東北住民が該当するとみている。⁽⁵⁴⁾ これらの見解は妥当か。そして、毛人は東北北半以北の「えみし」を対象とするものではなかったであろうか。

既述辻氏によれば、三世紀後半―四世紀初めの時点で、東北南半にまで初期古墳時代社会が成立するとされている。確かに、武の上表文の毛人五十五国の征服記事は、過去の関東や南部東北での実績を主体とするものであったかもしれない。しかし、武が宋王朝に上表文を奉ったのは順帝の昇明二（四七八）年のことであり、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘に見える獲加多支鹵大王が雄略天皇、即ち武にあてられ、既述前方後円墳や埴輪の展開などから、五世紀後半までには関東はおろか東北南半まで、ほぼ畿内政権下にあったことは疑いようがないのである。

とすれば、畿内政権側は、支配下にある東北南半の人々を通じて東北

北半の「えみし」の情報も得ていたであろう（既述のように、この時点ではまだエミシⅡ「えみし」とはなっていないが）し、東北北半が新たな征服対象となっていたに違いない。上表文が倭国側作成によるものであれば、五世紀後半には畿内政権がエミシを毛人に記していたことになり、中国側によるものであっても、それは畿内政権からの情報に基づくものと考えられるから、畿内政権側が北東方の集団をエミシと認識していたことを示していよう。エミシは、他ならぬ畿内政権の認識を前提として存在しているのである。

畿内勢力の東北南半までの支配は、古墳時代前―中期の段階でなされていたものと考えられ、次なる征服の対象は、より北東方に存在した自分たちとは本質的に異なる「えみし」を主体とするものになったはずである。従って、『宋書』の書かれた五世紀後半（古墳時代中期後葉）における、畿内政権側が認識したエミシには、少なくとも「えみし」が含まれていたと考えなければならない。

中国の毛人は、『山海経』海外東経・大荒北経や『淮南子』などに見える毛民に基づくもので、上表文が純粋な漢文であることから、『宋書』やそれ以降の日本の毛人は中国の毛人を取り入れたもので、その理由は中国の毛人が東北の方の住民だったからだとされる。⁽⁵⁶⁾ 『山海経』郭璞注は、毛民が毛人と同義であると記している『海外東経』⁽⁵⁷⁾ ことも、毛民が毛人と同義であることを証するものであろう。筆者は中国では毛人が、元来北東方の人々を指すものであったがために、初めて北東方のエミシに対する表記として毛人が用いられたことを契機に、エミシは、政権の拡張に伴って次々と未支配の北東方の集団に移行していき、最終的に

「えみし」に限定されることになったものと解する。

また、毛人（毛民）の用字は多毛であったことに由来するともされ、⁽⁵⁸⁾『山海經』「大荒北經」郭璞注や『淮南子』高誘注も毛民が多毛だと記しているから、⁽⁵⁹⁾中国や日本の毛人には多毛の意味があったことは疑いない。民族誌上のアイヌの多毛性、豊かな鬚をたくわえた風貌などは周知のことである。エミシは畿内や東国などにも存在したと考えられるから、多毛というのは未開性や勇猛さの象徴であったのかもしれないが、もし、後世のアイヌ的風貌がその祖先集団にまでたどれるとすれば、それは「えみし」にもあてはまったに違いない。

空海が陸奥守として赴任する小野岑守を送った歌に、「毛人羽人境界を接し、猛虎豺狼処々に鳩まる。」⁽⁶⁰⁾『性靈集』「贈野陸州歌」などに見える。当時「えみし」の表記には、夷・倭・夷俘など蝦夷から派生した用字が用いられており、毛人を漢籍に通じた空海の色とみることも可能かもしれない。しかし、『性靈集』の編纂は承和の初年頃とされ、九世紀前半までには成立していたと考えられるから、当時陸奥に住むとされている毛人には、当然「えみし」が意識されていたものとみるべきである。そこには、毛人がかつて「えみし」を表記する用字であった史実が反映されてはいまいか。佐伯今毛人を佐伯今蝦蟇に作る例があるし「天平勝宝元（七四九）年「造東大寺司解」、蝦蟇は毛人に通じる用字で、蝦夷に先行して用いられたと考えられるから、毛人は蝦蟇と同様、「えみし」の漢字表記として用いられたことがあったことを物語ってはいまいか。

国史上の「えみし」に対する用字は蝦蟇（夷）であるが、蝦蟇（夷）

の用字が使われる以前には、「えみし」を対象とした表記として毛人が用いられた可能性はある。以上、『宋書』の毛人には少なくとも「えみし」が含まれた可能性を指摘するものである。毛人は、エミシが「えみし」に限定される以前の、東北南半以南の「伏はぬ」「荒ぶる」ものを対象とした段階で用いられ、畿内政権側の征服対象が東北北半に及び、エミシが「えみし」を対象とするものとなると、毛人もまた「えみし」を対象とする用字となったと理解する。従って、最終的にエミシが「えみし」に限定されると、短期間ではあれ、毛人も「えみし」に限定されるようになったと考えられる。

四 毛人から蝦蟇、さらに蝦夷へ

（一）毛人から蝦蟇へ

次に蝦蟇と蝦夷について考察を加える。皇極紀元（六四一）年九月癸酉から持統紀三（六八九）年正月壬戌までの十三箇条にわたって蝦蟇が見られるが、その記事のほとんどが坂本太郎氏分類によれば実録的なものとされ、⁽⁶²⁾蝦蟇は『唐書』にも見えていることなどから、蝦蟇は当時の記録の中に実際にあったもので、我が国では蝦蟇が毛人と蝦夷の中間の用字として用いられたと考えられる。⁽⁶³⁾とすれば、「えみし」を表記する用字は、毛人→蝦蟇→蝦夷という推移を経たことになる。

日本の使節とともに入唐した「えみし」について、『唐書』には「使者蝦蟇人と皆に朝す。蝦蟇も亦た海島の中に居る。その使者鬚長四尺許、箭を首に瑣み、人をして弧を載せて立たしめ、数十歩にして射るも中た

らざるは無し。」「東夷伝日本」と見える。『通典』『唐会要』にも同様の記述があるが、蝦夷に作る。『日本書紀』にも「小錦下坂合部連石布、大仙下津守連吉祥をして唐の国に使せしむ。仍て道奥の蝦夷男女二人を以て唐の天子に示す。」「齊明天皇五年秋七月（朔）丙子朔戊寅」と見えており、唐側の記事は日本側資料からも裏付けられるが、この部分は「えみし」を蝦夷に作る。

『唐書』『子天智立つ。明年使者蝦夷人と皆に朝す。』の記述は、倭使と蝦夷の入唐を天智二（六六三）年としているとも解し得るが、『唐書』の内容は『通典』『唐会要』と同様であることから、『通典』『唐会要』と同一資料に基づくもので、唐の顕慶四年（国史の齊明五（六五九）年になされた遣使に取材したものとするのが妥当であろう。

皇極紀から持統紀三年までの蝦夷と蝦夷の併用は、『日本書紀』編纂に用いられた資料に異なる二つの用字があったことに基づくことは確かであろうが、後述のように、蝦夷をめぐっては齊明朝に作為が加えられた可能性があるので、蝦夷関連記事が実録的であることを以て、直ちに蝦夷の成立を七世紀前半の我が国とみることはできない。国史上の毛人・肅慎が、中国の名称をそのまま使用していることを考えると、蝦夷（夷）表記も中国の用法をそのまま輸入したものとする理解に与し⁽⁶⁵⁾たい。

蝦夷（夷）は中国起源と考えられ、唐代以前のことを記す中国古典には見えていないから、その用字は唐代に成立したものと理解できる。齊明紀所収「伊吉連博徳書」が、「えみし」を見た際の高宗の好奇をもった驚きを記していることなどからも、中国王朝が初めて「えみし」を

見したのは、齊明五年のことと考えられる。従って、倭国で蝦夷が採用されたのは齊明朝と考えられ、中国唐代では我が国に先立ち、蝦夷と蝦夷の二つの用字が行われていたことになる。既述佐伯氏の論の如くんば、公記録に蝦夷を最初に用いたのは皇極朝ということになるが、筆者は毛人から蝦夷への転換がなされたのが齊明朝だと考える。

それでは何故、蝦夷は皇極紀から用いられているのだろうか。筆者は、かつて齊明朝前後に蝦夷表記が多いことに注目し、蝦夷の用字が齊明五年の遣使を契機として齊明朝に採用せられ、齊明女帝が皇極上皇の重祚であることから、『日本書紀』編纂段階で同一人物である皇極朝にさかのぼって使用したものとする仮説を提起したことがある⁽⁶⁶⁾。最近の拙稿においてそれに修正と補足を加えたところである。以下、さらにそのことについて検討を加える。

皇極紀の「えみし」関連記事が実録的とされることから、皇極紀の蝦夷が当時の記録に基づくものとする佐伯氏のような見解も生じよう。しかし、実録的とされる記事はそれ以前の崇峻紀にも見られるとされるので、それは崇峻・皇極朝の頃から、「えみし」関連記事が実録的になり始めた結果によるものと理解できる。蝦夷の採用は「えみし」関連記事が実録的、かつ具体的な内容をもつ阿倍比羅夫の北征記事などに見るように齊明紀以降と考えられる。

既述のように、毛人は、エミシが「えみし」に限定的に用られる以前に採用されたと考える。その後、畿内政権が律令国家建設を指向する過程で、主として東北半以北に住む自分たち（和人）とは異質な「えみし」を、和人系のエミシと峻別する必要が生じたのではないだろうか。

後述のように、蝦蟇から蝦夷への転換が国家の北方政策の進展を背景とした国史編纂事業と分かち難く結び付いていたとみられるから、毛人から蝦蟇表記への転換もまた、「えみし」を北東方の異民族とみなす畿内政権側の政治的な意図によってなされたものと考えられる。斉明朝は、唐への遣使を契機に公記録への「えみし」を表記する用字として、毛人にかえて蝦蟇を採用したものと理解したい。

かくして、「えみし」への表記は毛人から蝦蟇へと変化した。高橋富雄氏は、かつて毛人が蝦夷と表記されるようになるのは大化期以降の七世紀半ばであり、蝦夷は日本起源であって斉明朝の遣使を契機に中国史書に用いられたとしたが、既述のように蝦蟇(夷)は中国起源であり、斉明朝において採用されたのは蝦夷ではなく、実は蝦蟇であったと考えられる。蝦蟇を採用した斉明朝では、斉明天皇本人である皇極天皇までさかのぼって王朝所管公記録に毛人とあつたものを蝦蟇へと改め、持統朝において蝦夷への転換がなされるまで蝦蟇が用いられたものとする説を提起するものである。

(二) 蝦蟇・蝦夷表記の意味

それでは蝦蟇・蝦夷の用字は何に由来するものだろうか。現代日本でのこれらの音はカイで、それは古代の音をほぼ継承している可能性がある。民族誌上、黒龍江流域や樺太における住民のアイヌに対する呼称は、トゥングース・満州系が ka:mi 、ギリヤーク(ニヅフ)が ka:mi である。⁽⁷³⁾また、中国古典が樺太などのアイヌを元代に骨鬼、明代に苦兀・苦夷、清代に庫野・庫頁・庫葉などに作るの、ギリヤークやゴリドなどが樺

太のアイヌを ka:mi と呼んだことに由来するといわれる。⁽⁷⁴⁾従って、樺太などのアイヌは、歴史的に周辺諸集団からクイなどと呼ばれてきたことは明らかであり、それは蝦蟇・蝦夷の音カイに近いものである。

元代から今日までの呼称がほぼ同じであれば、唐代以前にもそう呼ばれていた可能性があり、中国人がアイヌの祖先を音で表記したのが蝦蟇・蝦夷であつたとする見解に与したい。⁽⁷⁵⁾蝦蟇(夷)は、アイヌの祖先集団に由来するカイなどを音写したものであつた可能性がある。それはアイヌやその祖先集団は、何故カイ・クイなどと呼ばれたのだろうか。このことについては、アイヌ語カイヌ(息子・甥など)との関連、或いは自称アイヌがアイヌ語のもつ声門閉鎖により、声門閉鎖をもたない人々にあつてはカイなどに聞き取られた可能性が指摘されている。⁽⁷⁶⁾また、菊池徹夫氏によれば、『秋日本紀』巻第一中の「蝦夷」へのカイの訓注、『伊呂波字類抄』に見える「夷^{東カイ}エヒス」などから蝦夷や夷が我が国でもカイに訓まれていた可能性があり、アイヌの呼称中に ka:mi 音が特徴として現れる可能性が、少なくとも現代アイヌ語の中にある。また、樺太では自分の息子や男の孫を ka:mi:ci と呼んだとして、カイ・クイがアイヌ自身の民族的自称に基づくものとする見解を示している。⁽⁷⁷⁾

これらの研究を重ね合わせると、素人考えながら、 ka:mi の語頭 ka 音が落ちた形が aynu アイヌであるから、 aynu とカイ・クイなどの他称とは、分かち難く結び付いているように思える。

すると、蝦蟇(夷)は表音語だったことになるが、中国語には表意語としての機能もある。夷が、中国の伝統的な東のエビス(異民族)を指すことについては諸説一致しているが、蟻についてはどうか。蟻は山に

棲む虫や鳥をあらわす語で、蝦は蝦に同じくエビの意であり、鬚の長いことなど毛深さの表現で、『唐書』『通典』『唐会要』の「鬚長四尺」、「伊吉連博德書」など、『日本書紀』に通じるものがあることから、蝦蜨は「えみし」の風俗や風貌をあらわしたものとする指摘もある。⁽⁷⁸⁾確かに、『宋史』が唐代の蝦蜨（夷）に対応する夷人を「身面皆に毛有り。」としているのも、そうした認識を継承するものであろう。アイヌ男子の多毛性や豊かな鬚をたくわえた特徴的な風貌は、それがアイヌのイメージとして誇張せられてきた嫌いもなくはないが、民族誌がおしなべて記すところである。それがアイヌの祖先集団にまでさかのぼるとすれば、毛人と同様、蝦蜨は表意的に用いられた可能性も否定できない。

ただ、既に唐代に併用されていたとみられる蝦蜨と蝦夷で、多毛を意味するのは実は蝦の方だから、カイの音を写すにあたつて蝦に続ける語として蜨・夷を用いたとすれば、それらはともに倭国北東方の海島のエビスにふさわしい語として認識されたからだと思われる。蝦蜨（夷）はやはり表音を優先させたもので、その風俗にふさわしい用字を用いたと考えておきたい。アイヌが周辺諸集団によつてカイ・クイなどと呼ばれ、唐代以降の中国文献もそれに近い音を以て表記してきたという事実は、唐代北海道におけるアイヌの祖先集団のある部分に由来するカイを、蝦蜨（夷）に写したとする蓋然性へと導くものと思われる。

(二)「えみし」と「カイ」

Koshanayn (u) などアイヌ人名の語尾には ayun がしばしばみられ、これも自称アイヌに由来するものとされ、アイヌ人名には実際に ayun

がつかなくとも、あらたまって呼ぶ時には「安之助アイヌ」などというように日本風の名の後に *ayun* をつけて呼ぶ例さえある。国史上には「えみし」の人名が多数見え、中にはアイヌ語による解釈が可能なものも含まれているとされるのに、*ayun* を語尾にもつ人名は皆無である。⁽⁸⁰⁾

このことから、東北北半から南西部北海道にあった「えみし」はアイヌ語系の言語は有していたものの、*ayun* を自称してはいなかったことを示している。従つて、唐代にカイなどと呼ばれたのは、実は「えみし」ではなく、カイなどの音写である蝦蜨・蝦夷もまた「えみし」に由来するものではないことになる。

「えみし」を表記する蝦蜨・蝦夷は、中国唐代の用字によつたものであつた。『唐書』には毛人とともに、新たに蝦蜨のことが見え、『通典』

『唐会要』には毛人のことは見えないが、代わつて蝦夷のことが見える。既述のように、『唐書』には毛人が倭国の「東北に大山を限て」るのに対して、蝦蜨人は「海島中」にあることを記している。『通典』『唐会要』も蝦夷が「海島中の小国」であると記す。唐代のことを記す三書がともに蝦蜨（夷）が倭国の使者とともに入朝したことを記しており、これに対応する前掲齊明紀には、使者が伴つた「えみし」は道奥蝦夷（熱蝦夷）と記されている。従つて、蝦蜨（夷）が海島中にあるとする唐側の記述は、それが陸奥の「えみし」であつたとする倭国側記述と齟齬するもので、唐側の蝦蜨（夷）のことは倭国から得た情報ではなかつたことになり、海島中の蝦蜨（夷）に対して、倭国に陸続きの毛人という並存認識が唐側にあつた可能性を示している。既述『宋史』が「東北隅大山」「山外」の毛人と、「東境海島」の夷人とを併記しているのもこう

した認識を継承するもので、夷人が唐代の蝦蜺（夷）に対応することは明らかである。やはり、唐側には倭国に接する「えみし」Ⅱ毛人、倭国から海を隔てた蝦蜺（夷）の区別があったとみるべきであろう。

既述のように、倭国の毛人のことは『宋書』が初見と考えられ、毛人は唐代以前に中国側の認識の中にあつたもので、倭国からの情報に基づくものであつた。北海道の文化は南西部と北東部とに二分せられ、東北半から南西部北海道は縄文時代早期以降、おしなべて共通性の強い文化圏を構成してきたのに対して、北東部北海道はこれとは異なる文化圏を形成してきたとみられる。これらのことから、中国唐は、元来倭国北東方の毛人として認識してきた集団（日本側認識の「えみし」と、北東部北海道の蝦蜺（夷）とを別のものとみなしたと理解できる。⁽⁸²⁾

これに対して、国史は北海道方面の「えみし」について、渡島蝦夷以外の記載がほとんど見られないことから、少なくとも斉明朝頃の倭国側には北東部北海道の集団についても「えみし」と区別していなかったようである。これは、倭国側が北東部の集団との接触の機会が稀であつたことにもよるが、就中後北CⅠ式期以降進展した「えみし」と北東部との文化融合などから、北東部の集団についても「えみし」と同一視し、渡島蝦夷などに一括していたことを示すものと考ええる。当時、両者はともに北大Ⅲ式土器の文化圏を構成していたのである。

北大Ⅰ・Ⅱ式土器に一般的にみられた縄文が北大Ⅲ式期には消失し、新たに器面調整のために土師器と同様の刷毛目痕のある土器が出現するなど、北海道における本州土師器文化の影響が顕著になる。⁽⁸³⁾ こうして擦文文化は成立するが、その背景について桜井清彦氏は、北海道擦文

文化に受容された北部東北地方の方形の竪穴住居、カマド、土師器、原始的な農耕などを「蝦夷文化」と規定し、「蝦夷文化」が比較的速やかに北海道に受容されて擦文文化が成立しているのは、両者がアイヌないしアイヌに近いものであつたことによるものとしている。⁽⁸⁴⁾

既述のように「えみし」のうち、少なくとも南西部北海道にあつた集団が、北東部の集団とともに後世アイヌを構成することは歴史的にみても明らかである。また、考古学的知見から続縄文Ⅰ擦文期の北海道では、今日のアイヌの祖先たちが多少の形質的、文化的地方差をもって生活していたとされるから、北海道のアイヌの祖先集団は、南西部と北東部との間に多少の差異はあつても、同系統の集団であつたと考えられる。

アイヌを自称して周辺諸集団からカイ・クイなどと呼ばれたのは、東北半から南西部北海道における「えみし」ではなく、多少の差異は伴うものの、ほぼ同系の言語、及び文化を有する北東部北海道におけるアイヌの祖先集団だつたと考えられる。唐代にあつては「えみし」と、北東部北海道の集団（「カイ」とは自称が異なつたと考えられる。

北東部の「カイ」と「えみし」とは、ある程度の差異はあれ、ともに今日のアイヌ語に連なる言語を用いるなど生活・文化、形質の上で類似していたと考えられる。中国側は、斉明五年以前に北東部北海道の「カイ」を蝦蜺（夷）に認識しており、倭使が伴つた「えみし」を蝦蜺（夷）に誤認した可能性がある。このことを契機として、斉明朝では蝦蜺が毛人にかわる「えみし」表記となるに至つたと考えている。

南西部の「えみし」と北東部の「カイ」とに、大きく二分されていた北海道アイヌの祖先集団は擦文期を通じて文化的融合を進展させ、アイ

ヌ文化の形成にむかっていたと考えられる。それに連動して言語的統合もなされ、今日のアイヌ語に連なる言語が形成されていく過程で、自称 *shim* などの語彙がアイヌ全体のものになったものと理解できる⁽⁸⁶⁾。とすれば、北東部に「蝦夷文化」を伝え、全道に擦文文化を開花せしめた主体は直接的には南西部の「えみし」であつたと理解できよう。

(四) 蝦夷(夷)と肅慎

北東部北海道におけるアイヌの祖先集団「カイ」のことが唐に知られるからには、その情報は樺太から黒龍江下流域や沿海州を経由して中国に伝えられたと考えられる。蝦夷(夷)の現れる唐時代の北海道は、概ね擦文文化前半期(北大Ⅲ式期を含む)にあたっている。北東部北海道の集団は、概ね後北C₂・D式期→擦文期、南部樺太を拠点として道北・道東や南部千島などのオホーツク海沿岸にかけて展開したオホーツク文化の形成者(以下オホーツク人)と隣接した。オホーツク人は、海に適應した漁撈や狩猟を主たる生業とし、羆に対する特別の信仰を有した北方系の集団であり、大陸との密接なる交流を維持したものと考えられる。それは、靺鞨や女真に由来するとみられる遺物がオホーツク文化の遺跡から発見されることによつても証せられる⁽⁸⁷⁾。菊池俊彦氏は、オホーツク人が黒水靺鞨などを介して唐に朝貢したことが知られる流鬼であり、現在のギリヤークにあてられるとして⁽⁸⁸⁾いる。

しかし、民族誌上のギリヤークの主たる葬送が火葬であるのに対して、オホーツク人には被葬や葺石葬などが卓越する。また、『通典』に見る流鬼の「死解封樹」[「卷二百辺防十六」]がミイラ風習を意味するもの

で、オホーツク人には *Mummification* が行われており、それは樺太アイヌの *Mummification* の起源と考えられる。このことなどから、オホーツク人(流鬼)はアイヌに同化し、拠点の樺太においては樺太アイヌを形成することとなった集団であつたと理解できる⁽⁸⁹⁾。従つて、流鬼を現今のギリヤークにあてることについては異論があるが、オホーツク人を流鬼にあてることには与するものである。

後北式・北大式土器にみられる円形刺突文は、オホーツク文化初期に位置づけられる十和田式土器からの影響によるものとされるから、アイヌの祖先集団とオホーツク人との接触は五世紀まではさかのぼる。また、道内のオホーツク人は、最終的には擦文期におけるアイヌの祖先集団(以下擦文人)に同化されるが、その過程でオホーツク文化はトビニタイ文化へと変容していく。オホーツク式土器と擦文土器の融合形態とみなされるトビニタイ式土器には初期の擦文土器が伴い、九世紀代にはオホーツク文化が崩壊して擦文文化への移行が始まるとされている⁽⁹⁰⁾。から、オホーツク人と後北式期→擦文期の北東部北海道アイヌの祖先集団とは、長きにわたり交流を維持してきたのである。

以上のことから、オホーツク人(流鬼)などと北海道のアイヌの祖先集団との接触は唐代以前から始まつており、それは流鬼が唐に遣使した時点でも続いていたと考えられる。北東部北海道の集団は、その自称から流鬼(オホーツク人)によつてカイなどと呼ばれ、流鬼の唐への朝貢か、或いは黒水靺鞨などを介して中国に知られており、中国唐はそれを蝦夷・蝦夷に音写したと理解できる。

さて、斉明紀などに散見する肅慎については、南西部の「えみし」に

対して北東部北海道におけるアイヌの祖先集団とする見解も生じよう。

しかし、既述のように、当時全道には北大Ⅲ式土器の文化があり、全道が文化的融合により、一つにまとまろうとする動きを継承していたと考えられる。また、斉明紀のもととなった資料が両者を敢えて書き分けているのは、両者に決定的な差異があったからに外なるまい。

石附喜三男氏は、斉明紀の肅慎について樺太系でオホーツク文化の先駆とされる鈴谷式土器の文化を有する集団が南下したものとする見解を示した。⁽⁹³⁾今日の考古学上の知見では、鈴谷式土器群の終末年代は五世紀以前に位置づけられるなど、石附説は直ちには認め難いものとなっているが、肅慎が国史上にあらわれる七世紀には、北大Ⅲ式期頃のアイヌの祖先集団とオホーツク人とが隣接していた。従って、肅慎をオホーツク人そのものとみえることは可能であろう。

北海道オホーツク文化の遺跡はオホーツク海沿岸部などに限定されるが、一時的南下を想定することも困難ではあるまい。現に津軽半島北西端、陸奥湾に面する脇野沢村瀬野遺跡からはオホーツク式土器二点が発見され、それらは八世紀前後の江ノ浦B式などに相当するものという。⁽⁹⁵⁾これが直ちにオホーツク人の南下を意味するものとは限らないが、少なくとも間接的にはあれ、オホーツク人の痕跡は本州にまで到達していたと考えられる。また、新潟平野に位置する巻町南赤坂遺跡からは、後北C²・D式土器などとともに樺太の系統を引くともみられる黒色土器が出土しており、欽明紀五年の肅慎の佐渡渡来記事との関連も指摘されている。⁽⁹⁶⁾少なくとも斉明紀のもととなった原資料は、オホーツク人を肅慎に作って蝦夷と区別したのではなかったか。とすれば、国史がオ

ホーツク文化の南下に敏感に反応したことを示すものとなる。

また、阿倍比羅夫は肅慎討伐後、毛皮とともに「生ける熊」二頭を斉明天皇に献じている。熊の成獣を捕えるのは極めて困難であることから、春に親熊を狩猟した後、捕獲した仔熊を集落で飼育してイオマンテを行う民族誌上のアイヌの風習が想起せられる。アイヌ文化の中核はクマ祭を中心とした文化複合に求められるとされ、その象徴ともいべき仔熊飼育型イオマンテの成立は十八世紀以降の近世蝦夷地とする見解がある。⁽⁹⁸⁾オホーツク文化に仔熊飼育型のクマ送りが行われていたか否かは見解のわかれるところであるが、少なくともアイヌの熊に対する信仰、及び儀礼体系の源流は、直接的にはオホーツク文化の熊への特別な信仰にたどることができる。オホーツク文化から継承された諸要素が、アイヌ文化全般に重要な位置を占めていることは、多くの研究者の指摘するところである。⁽⁹⁹⁾斉明紀の生熊の出所はオホーツク人（肅慎）であった可能性がある。

南西部北海道の「えみし」と北東部の「カイ」は、既述のように同形式の土器をもち、形質や言語的にも近縁だったと考えられるから、斉明朝の我が国では両者をあえて区別する必要はなかったのではあるまいか。唐代古典が、元来我が国の「えみし」を毛人に、「カイ」を蝦夷（夷）に認識していたと考えるが、倭国・日本では「えみし」と「カイ」とを区別せず、両者とともに蝦夷（夷）に表記したのではなかろうか。

五 蝦蟇から蝦夷表記への転換（エミシからエビスへ）

（一）エビス認識の成立

毛人↓蝦蟇↓蝦夷という用字上の変化に対応する可否かはしばらく措くとして、「えみし」への呼称、及び認識にも変遷があったことが知られている。例えば、『日本書紀』国史大系本には蝦蟇・蝦夷・夷などについて、エミシやエビスなどの仮名が施されている。記紀に見える蝦蟇（夷）は八十力所以上あるにもかかわらず、当初から訓注としてエミシとしてあるものは一カ所もなく、記紀成立当初の訓みは不明である。⁽¹⁰⁾とはいえ、これらの振り仮名や今日までの歴史通念から考えて、蝦蟇・蝦夷・夷がエミシやエビスなどに訓まれた事実があったことまでは否定できない。

『日本書紀私記』（甲本）には「蝦夷 エビス」とあり、同（丙本）の「蝦夷 恵美須」はエミスに解され、『釈日本紀』は神武即位前紀の愛瀾詩について、エミシに訓んで「夷也」の注記があるという。⁽¹¹⁾このうち『日本書紀私記』丙本に恵美須（エミス）とあるものは実はエビスであるかもしれない。ただ、『諏訪大明神書詞』の「夷」にエミスの訓が施されたものがあるから、古訓にもエミスがあったと考えてよいだろう。蝦夷の訓として、エミスについてはあまり注目されていないが、音韻の上からエミシ↓エミス（↓エビシ）↓エビスなどの変遷過程⁽¹²⁾が想定できそうである。

『釈日本紀』秘訓第四に「蝦夷 養老説 衣比須」とあり、養老五（七二二）年の下総国葛飾郡大嶋郷戸籍の人名「孔王部衣比須」がある

ことなどから、養老年間までにはエビスがあったことは明らかである。従って、奈良時代には「えみし」がエビスと呼ばれ、そのように認識されていたことは疑いなかろう。また、平安期の『日本霊異記』他田舎人蝦夷の訓注に衣比須、『新撰字鏡』に「蝦夷 衣比須」と見え、『類聚名義抄』『伊呂波字類抄』の訓がエビスであってエミシが見られないことから、エミシが古くエビスはその後に生じたことは、やはり疑う余地はない。⁽¹³⁾

エビスは、エミシとともに異民族を意味する通称とされ、『伊呂波字類抄』は夷・蛮・戎・狄・辺などをあてており、『一本定家卿仮名遣』には海辺人をエビスに訓んでいる。⁽¹⁴⁾平安期におけるエビスは、中国伝統的な四方の異民族（夷・蛮・戎・狄）とともに、辺境の人々にも用いられており、それが中華意識に基づくことは明らかである。中世の都人は、自分たちとは道理の異なる鎌倉武士を東夷（あずまえびす）と称した。エミシは屈強な仇敵を意味する国語に由来し、侮蔑の意味を含むものでなかったのに対して、エビスには異民族など自らとは異質のものに対する侮蔑意識を含むものであった。

日本における中華意識が、律令国家の形成と深くかかわっていることは諸説一致しており、エミシからエビスへの転換も中華観によるものであることは明らかである。既述のように毛人から蝦蟇、さらに蝦夷へと用字上の変化は、我が国が氏姓制社会から律令制社会へと、変貌を遂げる過程で生じた中華的異民族観によるものと考えられる。とすれば、エミシからエビスなどへの呼称の転換は認識にとどまらず、用字とも呼応するものだった可能性がある。律令国家は一日にして将来されたもの

ではなく、長い試行錯誤の末に成立したのであるが、エビス認識もそうした律令化の過程で生じたと考えてよいだろう。「えみし」関連記事や用字からは、律令国家のエビス認識を探ることができそうだ。

例えばヤマトタケル東征記事には、記紀間では蝦夷概念上、大きな差異がみとめられる。即ち、既述景行記の東方十二道の中にあつたとされる蝦夷は、「荒ぶる」「伏はぬ」の表現にみるように、国家に抵抗する辺境の民として描かれており、そこには異民族としてのイメージはあまり感じられなかった。一方、景行紀では「其れ東の夷の中、蝦夷是れ尤も強し。男女交り居り、父子の別無し。冬は則ち穴に宿り、夏は則ち櫟に住む。毛を衣、血を飲んで昆弟相疑ふ。山に登ること飛ぶ禽の如く、草を行くこと走る獸の如し。恩を承りては則ち忘れ、怨みを見ては必ず報ゆ。是を以て箭を頭髻に藏し、刀を衣の中に佩ぶ。或は党類を聚めて辺界を犯す。或は農桑を伺ひ、以て人民を略む。撃てば則ち草に隠れ、追へば則ち山に入る。故に往古以来、未だ王化に染はず。」〔四十年秋七月〕と見え、野蛮な異民族としてのイメージが強く表れている。

以上のことから、既述景行紀の表現は律令国家の中華観に基づいたエビス概念の典型的な表れと見る。蝦夷は野蛮な異民族として描かれ、明らかに侮蔑意識Ⅱエビス認識が認められるが、これは『日本書紀』編纂時、即ち奈良養老年間の認識を反映するものと考えられる。既述のように、記紀のヤマトタケルは後世の歴史から作り上げられた英雄像であるとされ、その記述には作爲的な部分はあるが、律令国家の認識は反映されているものとみられる。

(二) 蝦蟇から蝦夷へ

奈良時代には存在していたエビス認識は、どこまでさかのぼれるだろうか。毛人はエミシ、蝦夷はエミシの訓みもあるが、エビスと訓ませるための貶称であるとする見解があり、既述のことを考え合わせれば、エミシとしての毛人・蝦蟇から、エビスとしての蝦夷への転換があつたようにも思える。既述のように、皇極紀から持統紀までの蝦蟇と蝦夷の併用は『日本書紀』の原史料中に、既に両様の用字で記されていたことに基づくもので、蝦蟇は皇極紀元(六四一)年から持統紀三(六八九)年にかけて行われ、持統紀四年頃からは蝦夷と記すようになったとする佐伯氏の見解に従えば、蝦蟇から蝦夷への変化は持統四年のこととなる。それでは蝦蟇から蝦夷への変化は何を意味するのであろうか。

高橋富雄氏は、かつて『日本書紀』蘇我蝦夷について、本来は毛人であつて蝦夷は後世の作爲によるものとする見解を示した。⁽¹⁰⁾これに対して、佐伯有清氏は、『日本書紀』が蘇我蝦夷に作るのは推古十八(六一〇)年一箇条のみで、他の六箇条は蘇我蝦蟇に作ることをあげ、後世の作爲は推古朝の一箇条のみで、既述のように、元来蘇我毛人だったものを皇極紀からは蘇我蝦蟇に作ったのだという。⁽¹¹⁾また、蝦夷表記も含めてエミシを卑賤視するものではなく、『日本書紀』のエミシは蝦夷で統一する原則に従っているに過ぎず、⁽¹²⁾天武紀の鴨田蝦夷や『日本霊異記』宝亀四(七七三)年の他田舍人蝦夷などの人名があることから、人名としての毛人・蝦蟇・蝦夷は七世紀から九世紀初めにかけて、貴族から庶民や隸属民に至るまで広い階層にわたっており、一切忌避されていないとする指摘もある。⁽¹³⁾

しかし、人名としてのエミシは毛人としてあるものが圧倒的に多く、蝦夷表記によるものは稀な部類とみてよいのではないか。ただ、蘇我蝦夷を蘇我毛人に、佐伯今毛人を佐伯今蝦蜋に記す例などから、蝦蜋が毛人に通じて用いられた可能性も指摘されている⁽¹⁰⁾。やはり蝦蜋が毛人に通じ、既述の蝦蜋が斉明朝によって採用せられたとする理解に拠って、政権の公記録は斉明朝以前には蘇我毛人であり、斉明朝において皇極朝までさかのぼって蘇我蝦蜋に作ったものと理解できる。侮蔑意識を含まなかったのは毛人と蝦蜋であり、推古朝の蘇我蝦夷は、記紀編纂時まで毛人としてあった表記を蝦夷に書き換えた結果であったと考えたい。

蝦蜋は毛人に通じて用いられているらしいが、そこには当初から侮蔑意識はなかったのだろうか。蝦蜋も東方の辺民に用いられており、その用字には毛人と同様、何らかの中華的差別意識は含まれているものの、人名に用いられるなど、それは一般にはあまり強いものではなかったとする見解が妥当なものと思われる⁽¹¹⁾。これに対して、中央による賜饗や叙位などの儀礼から、律令制以前には「えみし」への差別がなかったのに、律令制下では夷狄としての身分差別を基礎とした差別構造がみとめられるとされる⁽¹²⁾。とすれば、「えみし」が律令以前に蝦蜋と記されている段階では、おしなべて差別意識は強くなかったといえるだろう。エビスはエミシからの転訛であるが、暴強の貶称であり、蝦夷の訓はもともエビスであるとする既述高橋氏の見解には、概ね賛意を表するものである。エミシからエビスへの呼称、及び認識（概念）の転換は、蝦蜋から蝦夷への変化に対応するものように思える。夷が中国で伝統的に東方異民族を意味する語であり、エビス＝蝦夷には、異民族に対する中

華観に基づく侮蔑意識があったものと理解できる。エミシからエビスへの転換の時期を知る鍵は、実は用字にあったのではないか。

蝦蜋から蝦夷への転換が持統四（六九〇）年になされたとする佐伯氏に拠って、筆者はエミシ＝蝦蜋からエビス＝蝦夷への転換もまた、持統朝になされたと考える。それではそうした転換は何によってたらされたのであろうか。蝦蜋から蝦夷への転換がなされたこととされる持統四年といえ、その前年には飛鳥浄御原令が施行されていることが注目される。蝦蜋から蝦夷への用字上の変化について、筆者は元来屈強な仇敵を意味していたエミシが、畿内政権が律令化する過程で中華的異民族観からエビス認識へと変質し、飛鳥浄御原令の施行に合わせる形で蝦夷に転換されたものとする仮説を提起した⁽¹³⁾。

以下、そのことについて検討する。まず、天皇号は飛鳥浄御原令編纂・施行に伴って成立したと考えられ、同様に日本国号についても天皇号や浄御原令の編纂・施行と密接な関係があるとする指摘がある⁽¹⁴⁾。浄御原令の編纂・施行がなされた天武・持統朝こそは、律令国家建設にむけての一大転期であったといえる。天武天皇は皇后とともに、大極殿において皇親や諸臣を前に律令の編纂を宣言し「十（六八二）年二月庚子朔甲子」、翌月には川島皇子らに国史編纂を命じている「三月庚午丙戌」。国史編纂事業はまた、律令国家建設と分かち難く結び付いていたのである。天武崩御後、持統朝にはついに「令一部廿卷」が成り、諸司に班賜せられたという「三年六月壬午庚戌」。浄御原令の施行は、およそ養老考課令にあたるとみられる「考仕令」の存在「四年夏四月丁未庚申」、「戸籍を造らんに依れ」とする詔が諸国に発せられてい

ること「四年九月乙亥朔」などからも確認される。

律の制定は疑問視されるものの、このように律令官人制の確立、税目の整備、編戸造籍の定期的実施を規定した淨御原令の施行は、後の大宝律令下におけると質を同じくする体制の確立を示しており、古代天皇制国家の成立過程に一時期を画するものであった。⁽¹⁰⁾ このことは国史上のエミシ関連記事がおしなべて実録的となるのが、天武・持統紀以降であることと無関係ではあり得ない。天武・持統朝は、そうした意味での画期をなしているのである。就中、持統朝は皇太孫ともいべき文武の、来るべき治世にむけての中継的な側面をもっており、文武朝に大宝律令が制定・施行されて律令国家体制が確立されるのは意図せられたものであろう。

「えみし」を表記する用字は、持統四年以降公式には蝦夷に統一せられたのであり、それは飛鳥浄御原令施行に伴う国家体制整備の一環としてなされたものと理解したい。律令国家建設に連動する形で進出した国史編纂事業の下、「えみし」を日本国家北東方のエビスとみなす中華的国史観が、虻から夷への転換をもたらしただものであろう。

国史上での毛人は、敏達紀「蝦夷」の「魁帥綾積等」への訓注「魁帥は大毛人なり。」「十年閏二月」のみであり、その記事も実録的なものとはいえず、訓も後世のものであることは明らかである。既述のように、皇極朝・持統三年の公記録中の毛人は蝦蟇に改められ、持統四年以降は蝦夷に統一された。皇極の前代である舒明朝以前の公記録は、エミシをおしなべて毛人に作っていたものと思われるが、奈良時代の記紀編纂時、一律に蝦夷に書き換えることを原則としたものと理解できる。景行記の

蝦夷もその例であり、この原則は『古事記』にも用いられたのである。また、皇極紀元年・持統紀三年には蝦蟇と蝦夷が併用されているが、このことは公記録に蝦蟇が用いられた皇極元年・持統三年のもので、記紀編纂時に新たに加えられた資料の毛人については、一律に蝦夷に統一することを原則としたことを示している。

(三) エミシとエビスの併存

日本律令国家成立の過程で、「えみし」に対する異民族観から蔑称エビスが生じ、持統四年以降、蝦夷が採用されて訓もエビスに統一されたとする私見は既に述べた。一方では『続日本紀』国史大系本には蝦夷の用字をなして、エミシに訓ずるものがあり「延暦八（七八九）年九月十九日詔など」、一応これは後世のものであると考えられるが、エミシの訓が奈良時代以降にも行われていた可能性も否定できない。既述のように、奈良・平安前期までの人名にみられる毛人や蝦蟇はエミシに訓まれていたと考えられるが、少数しか確認せられない人名の蝦夷は、「えみし」に対すると同様、エビスに訓まれたものと考えてよいだろう。

既述『性霊集』は、毛人・羽人とともに陸奥国の住民としているから、「えみし」を指していると考えてよい。「えみし」に対する当時の認識はエビスであり、『性霊集』の記述には偏見や侮蔑意識がうかがえるから、著者空海の「えみし」に対する認識はエビスであったとみられる。同時代人名にみられる毛人はエミシである。このことは、奈良・平安前期には毛人については、エミシとエビスの二つの訓みが並行したことを示すものではあるまいか。蝦夷になされた後世の訓注にエミシとエビス

が併用されるのも、「えみし」をエミシ・エビス両様に認識していたことを背景としたものとは考えられまいか。

持統紀以降の公記録が蝦夷にかえて蝦夷を採用した段階で、訓及び認識も公的にエビスに統一されたものとみられる。にもかかわらず、「えみし」への用字である蝦夷・夷などに後世なされた訓は、エミシ・エミス・エビシ・エビスなど実に多様である。このような複雑な混乱が生じたのは、国家が「えみし」を蝦夷Ⅱエビスに認識した律令制下において、既にエミシ・エビスなどの訓や認識が併存していたからではないだろうか。蝦夷の訓（認識）として、エビスが律令国家による公式のものとしたにもかかわらず、個々人の段階ではエミシに訓じる場合があったというような、公と民との「えみし」に対する認識の乖離があったのではなからうか。

認識の乖離についてはエゾについてもみとめられる。応徳三（一〇八六）年の「前陸奥守源頼俊申文」⁽¹²⁾「御堂撰政別記裏文書」に見える、延久二（一〇七〇）年になされた「衣曾別島荒夷并に閉伊七村山徒」討伐記事が、エゾの初見史料とされる。記事の討伐対象は荒夷（アラエビス）であつて衣曾は地域名にすぎず、エゾは当初から人を対象とするものではなく、実は東北北辺や北海道方面への地域名として用いられ始めたものであったのである。エゾは安倍氏に代表される俘囚勢力が自分たちとは異質な北方社会を対象に用いたとする理解は妥当なものと思われ、エゾが地名に由来する可能性⁽¹³⁾は高い。地域名が、転じて人間集団に用いられる例は珍しくないから、やがてエゾは東北北辺以北の人間集団を対象とすようになったものと理解できる。

また、奥六郡や山北三郡の俘囚勢力が、東北北辺や北海道方面をエゾと呼んでいた段階でも、源頼俊の認識にも示されているように、中央（王朝国家）によるエゾ地域の人々への認識は、俘囚勢力に対するものと同じく、エビスに一括されていたと考えられ、中央と現地北部東北とは認識に乖離があったものと理解される。⁽¹⁴⁾中央が東北北辺の人々をエゾと呼ぶのは平安時代末の和歌が初見であり、エゾは当初から人間集団を対象として用いられ、それは王朝国家期における中世異民族認識成立を背景とするものと理解される。⁽¹⁵⁾

奈良―平安初期の個人、就中都の教養人などには、かつて国家に対して勇敢に抵抗したエミシについての知識が残っており、蝦夷をエミシなどに訓むこともあったのではないだろうか。今後の課題として残さねばならないが、「えみし」の場合も公と民との認識の乖離、そのようにでも考えなければ、このような訓の混乱は説明できないように思える。

律令国家領域の「えみし」の公民化が顕著となる桓武・嵯峨朝を契機として、元来の国家支配に抵抗する蝦夷像に変化が生じ、国史上から蝦夷の用字が消滅し⁽¹⁶⁾、しばらくの間死語化したのである。蝦夷の文献上への復活は鎌倉時代末の『沙汰未練書』の蝦子、『金沢文庫文書』『鎌倉年代記裏書』などの蝦夷であり、訓（認識）もエゾであつた。従つて、エミシ・エビスは「えみし」として把握すべきもので、「えみし」の系統は「えぞ」へと連なるものではあるが、エゾと古代エミシ・エビスは認識のうえで異質なものである。

律令国家統治の限界が明確化し、域内の「えみし」が俘囚化すると、エビスは俘囚を指すものとなつたと思われる。一方、元来エビス認識を

背景に成立した蝦夷が過去の存在になり、「えみし」はやがて平安時代

前期以降の中央識者の間で古典的なエミシ認識と結びつき、訓もエミシとすることがあったのではないだろうか。「えみし」を表記する蝦夷の死語化が、七世紀―九世紀初めにかけて、貴族から庶民・奴にいたる広い階層に行われた人名としての毛人＝エミシの消滅の時期と重なっているのは、元来勇敢な男子を意味したであろうエミシ認識の社会一般からの消滅に連動するものである可能性を指摘した所である⁽¹⁸⁾。

既述のように、「えみし」の主体が、元来アイヌの祖先集団の一部と同系の人々であったことから、エビスは小中華たらんとする日本律令国家による、言語を含めた文化系統上本質的に異なる「えみし」を峻別する概念だったと思われる。続縄文後北C¹式期にきざし、擦文期を通じて継承されたアイヌ文化形成への動きは、南西部北海道から北部東北の「えみし」と、北東部北海道の「カイ」との融合によって進化したものと理解されるが、その動きを加速させたのは、「えみし」と律令国家との交流と抗争から生じた緊張と危機感であったと考える⁽¹⁹⁾。

既述のように、エミシへの訓はエミシ→エミス→エビスなどの変遷をたどり、同様に表記も毛人→蝦蟇→蝦夷の転換を経たと考えられる。とすれば、明確な対応関係をなすものではないかもしれないが、表記と訓について毛人がエミシに、蝦蟇がエミスに、蝦夷がエビスにそれぞれ対応する可能性があるのではないかと考えている。エミスは、今日における歴史認識の中であまり問題とされていないが、それは短期間用いられたに過ぎない蝦蟇に対応するものだったからではなかったか。このことについても今後の検討課題としたい。

むすび

万葉仮名の愛瀬詩が示すように、畿内政権に抵抗する人々を意味する上代国語にエミシがあった。それは元来王権に抵抗するもの一般を対象として用いられていたが、やがて政権側の支配が東国に及ぶようになると、中国古典上の北東方の毛人（毛民）と結び付く中で、漸次北東方の未支配の集団を指すものとなった。

東北南半までは、政権側と本質的に異なる所のない和人系の人々が居住していたのに対して、東北北半から北海道にかけて居住していたのは、アイヌの祖先集団の一部とそれと同系の人々を主体とするものであった。前方後円墳や埴輪を伴う古墳文化が、終に東北北半以北に及ぶことがなかったのは、当時その地域にあった人々には、全く異質な畿内文化を受け入れる下地ができていなかったからだと理解できる。これが本小論における「えみし」である。

「えみし」を表記する毛人・蝦蟇・蝦夷は、中国側の作字になるものであるが、唐代には南朝宋代以来の認識である倭国（畿内政権）に陸続きの毛人、唐代の新しい認識としてさらに海を隔てた蝦蟇（夷）があると考えられていた。斉明朝頃までには「えみし」の居住域は、主として東北北半から南西部北海道までが把握されていたと考えられ、この時点で倭国側の認識は「えみし」＝毛人であった。従って、中国側の毛人は、倭国側認識の「えみし」にはほぼ一致するものであったと考えられる。これに対して、唐代の蝦蟇（夷）は北東部北海道にあったアイヌの祖先集団の自称 *emni* など由来するカイなどの音を漢字で写したもので、直

接「えみし」に由来するものではなかった。蝦蜋（夷）の情報は、北東部北海道の集団「カイ」がオホーツク海沿集団で接したオホーツク人（流鬼）、或いは流鬼と交流のあった靺鞨諸部族から、直接・間接に唐代中国にもたらされた可能性がある。

「えみし」と「カイ」との融合は、後世のアイヌを成立させるのであるが、実は両者は形質的、言語を含めた文化的に近縁な関係にあった。このために、斉明五年に入唐した倭使が伴った陸奥の「えみし」を見た唐側は、「えみし」を蝦蜋（夷）と同一のものと認識するに至った。これを契機として、斉明朝は本質的に自分たちとは異なる「えみし」を表記する用字として蝦蜋を用いるようになった。毛人から蝦蜋への転換は斉明朝になされたものであるが、斉明天皇が皇極上皇の重祚であるということから、皇極朝元年までさかのぼって公記録が蝦蜋に改められたものと理解できる。「えみし」が蝦蜋と表記されていた段階では、毛人と同様、差別意識はほとんど無く、その訓みとしてはエミシ、或いはエミスであった可能性がある。

その後、倭国が日本律令国家へと変貌を遂げる過程で強まった中華意識の中で、持統三年の飛鳥浄御原令施行を契機として、蜋にかわって中華的異民族観に基づく東のエビス（異民族）を意味する夷が、公式に用いられたと考えられる。同時に、日本律令国家の「えみし」に対する公式な呼称（認識）も、侮蔑意識を含むエビスへと移行したものと理解される。持統四年以降の公記録には蝦夷が用いられ、記紀編纂時に舒明紀以前の公記録、及び記紀編纂時に新たに加えられた資料について、「えみし」を含むエミシを毛人に作る箇所は、この原則に従って一律にエビ

スとしての蝦夷に書き改められたものと理解する。

一方、奈良・平安前期の中央識者層には古典的なエミシについての知識から、私的に蝦夷に対するエミシなどの訓や認識が、エビスに並行していたと思われる。それは域内「えみし」の俘囚化がすすむと、俘囚がエビス認識と結びついたのに対して、過去のものとなった蝦夷が古典上のエミシ認識との結び付きを強めたことを背景としていたと考える。

未熟者の論であり、伏して諸賢のご叱正をまつものである。

末筆ではあるが、小口雅史氏による児島恭子氏と佐伯有清氏の卓見を止揚する試み⁽¹⁰⁾、荒木陽一郎氏による研究史の整理、及びその研究成果に大きな啓発と示唆をうけたことを記し、謝辞となすものである。

註

- (1) 拙稿「古代蝦夷から近世蝦夷への連続性について」『年報社会科研究』第二十六号（岩手県高等学校教育研究会社会部会、一九八五年）、同「古代蝦夷（えみし）をめぐって」『研究年報白梅』第一〇号（岩手県立盛岡第二高等学校、一九九〇年）。
- (2) 拙稿「北部東北地方におけるアイヌ語地名が意味するもの」『岩手県立博物館研究報告』第一四号「釜石市・大槌町におけるアイヌ語地名について」【第二部】（一九九七年、以下拙稿aと称す）、同「『えみし』と『えぞ』についての一考察」『北奥古代文化』第二十六号（一九九七年、以下拙稿bと称す）。
- (3) 拙稿「古代蝦夷（エミシ）について」『岩手県立博物館だより』No. 七二（一九九六年）。
- (4) 註（2）に同じ。
- (5) 富樫泰時「円筒土器分布圏が意味するもの」『北奥古代文化』第六号

- (一九七四年)、同「縄文土器にみる南と北」『北日本の考古学』(日本考古学協会、一九九四年)。
- (6) 高橋信雄・高橋與右衛門「北海道の続縄文文化と東北」『北からの視点』(一九九一年度宮城・仙台大会実行委員会編、日本考古学協会、一九九一年)。
- (7) 高橋信雄「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器との対比」『奥古代文化』第三号(一九八二年)、光井文行「七・八世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『財』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅶ(一九八七年)、同「岩手県にみられる古代の北海道系土器について」『財』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅹ(一九九〇年)。
- (8) 相原康二「古代の集落と生活―蝦夷の集落」『新版古代の日本』第九巻東北・北海道(角川書店、一九九二年)。
- (9) 横山英介「擦文時代の開始年代修正について」『考古学ジャーナル』No・二九二(ニュー・サイエンス社、一九八八年)。
- (10) 佐藤嘉広「表十四 末期古墳群一覧表」『熊堂古墳群・浮島古墳群発掘調査報告書』(岩手県立博物館編、(財)岩手県文化振興事業団、一九九〇年)。
- (11) 小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。
- (12) 沼山源喜治「陸奥北半における末期古墳群の性格」『北奥古代文化』第八号(一九七六年)。
- (13) 林謙作「『五条丸古墳群』の被葬者たち」『考古学研究』二五巻第三号(一九七八年)。
- (14) 相原康二「コラム三 伝世品の遺物類」『新版古代の日本』第九巻東北・北海道(角川書店、一九九二年)。
- (15) 桜井清彦「考古学から見た蝦夷」『蝦夷』(社会思想社、一九七九年)。
- (16) 石附喜三男「北海道における八世紀前後の墳墓とその系統」『古代学』一二巻四号(一九六六年)。
- (17) 天野哲也「擦文文化成立における古墳の意義」『考古学研究』第二四巻第一号(一九七七年)。
- (18) 高橋信雄「東北北部の古墳文化と続縄文文化」『二十一世紀の考古学』(桜井清彦先生古稀記念会編、雄山閣、一九九三年)。
- (19) 山田秀三「アイヌ語族の居住範囲」『北方の古代文化』(毎日新聞社、一九七四年)。
- (20) 佐伯有清「刻字土器『夬』の意義」『サクシユコト二川遺跡』本文編(北海道大学、一九八六年)、同「夬」字記載の出土遺物―大川遺跡文字土器の意義―「一九九三年度大川遺跡発掘調査概報」(余市町教育委員会、一九九四年)。
- (21) 註(1) 一九九〇年前掲拙稿、及び註(2)に同じ。
- (22) 註(2) 前掲拙稿b。
- (23) 三浦圭介「本州の擦文文化」『考古学ジャーナル』No・三四一(ニュー・サイエンス社、一九九一年)。
- (24) 三浦圭介「新編弘前市史」資料編考古編(新編弘前市史編纂委員会、一九九五年)。
- (25) 註(23)に同じ。
- (26) 樋口知志「安倍氏の時代」『岩手史学研究』第八〇号(一九九七年)。
- (27) 註(2) 前掲拙稿b。
- (28) 高橋学「秋田県における平安時代の防禦集落」、高橋與右衛門・室野秀文・本堂寿一「岩手県における平安時代の防禦性集落」(ともに『考古学ジャーナル』No・三八七、ニュー・サイエンス社、一九九五年)、工藤雅樹「西根町小飼沢山遺跡、暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡発掘調査概要」『岩手考古学』第八号(岩手考古学会、一九九六年)などを参考にした。

- (29) 三浦圭介「青森県における古代末期の防禦性集落」『考古学ジャーナル』No.三八七(ニュー・サイエンス社、一九九五年)を参考にした。
- (30) 註(2) 前掲拙稿b。
- (31) 註(24) に同じ。
- (32) 註(23) に同じ。
- (33) 註(2) 前掲拙稿b。
- (34) 児島恭子「エミシ、エゾ、毛人」『蝦夷』の意味「竹内理三先生喜寿記念論文集 上巻 律令制と古代社会」(竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編 東京堂出版、一九八四年)、菊池徹夫「蝦夷(カイ) 説再考」『史観』第二二〇冊(早稲田大学史学会、一九八九年)。
- (35) 註(34) 児島前掲論文。
- (36) 荒木陽一郎「東北古代史研究講座」『蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題』第四回 神武紀歌謡における『愛瀾詩』の考察「弘前大学国史研究」第九四号(一九九三年)。
- (37) 水野祐「日本古代の国家形成」(講談社、一九六七年)。
- (38) 高橋富雄「蝦夷」(吉川弘文館、一九六三年)。
- (39) 高橋富雄「古代蝦夷」(学生社、一九七四年)、同「古代エゾ論の転換―毛野・東国・日高見論」『福島県立博物館紀要』第一号(一九八七年)、同「古代蝦夷を考える」(吉川弘文館、一九九一年)。
- (40) 白鳥庫吉「外国文化摂取の精神態度に就いて」『北大日本文化講義』第六(一九三九年)「白鳥庫吉全集」第一〇巻、岩波書店、一九七一年再録によった。
- (41) 註(37) に同じ。
- (42) 坂本太郎「日本書紀と蝦夷」『蝦夷』(古代史談話会編、朝倉書店、一九五六年)。
- (43) 藤沢敦「東北」『古墳時代の研究』第二一卷(雄山閣、一九九〇年)。
- (44) 川崎利夫。註(43) に同じ。
- (45) 辻秀人「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。
- (46) 註(15) に同じ。
- (47) 今泉隆雄「古代東北の南と北」『北日本の考古学』(吉川弘文館、一九九四年)。
- (48) 註(1) 及び註(2) に同じ。
- (49) 金田一京助『アイヌの研究』(八洲書房、一九二五年)。
- (50) 註(34) 児島前掲論文。
- (51) 註(36) に同じ。
- (52) 註(49) に同じ。
- (53) 註(38) に同じ。
- (54) 註(39) 一九八七年前掲論文、及び一九九一年前掲書。
- (55) 高橋崇「古代東北・エミシを知る基礎知識」『歴史読本』第三七巻第十七号(新人物往来社、一九九二年)。
- (56) 註(34) 児島前掲論文。
- (57) 小口雅史「『蝦夷』表記論の新展開」『文化における北』(昭和六二・六三年度特定研究報告書)(弘前大学人文学部人文学科、一九八九年)。
- (58) 註(34) 児島前掲論文。
- (59) 註(57) に同じ。
- (60) 川口久雄「性霊集」の項『國史大辞典』第七巻(吉川弘文館、一九八六年)。
- (61) 佐伯有清「古代蝦夷史についての一考察」『北方文化研究』一七(一九八五年)。
- (62) 註(42) に同じ。
- (63) 註(61) に同じ。
- (64) 大林太良「民族学から見た蝦夷」『蝦夷』(社会思想社、一九七九年)。
- (65) 註(61) 及び註(57) に同じ。

- (66) 註(61)に同じ。
- (67) 註(61)に同じ。
- (68) 註(34) 児島前掲論文。
- (69) 註(1) 一九九〇年前掲拙稿。
- (70) 註(2) 前掲拙稿b。
- (71) 註(42)に同じ。
- (72) 註(38)による。ただし、高橋氏は近年、註(39)一九九一年前掲書により、『宋書』などに照らして毛人問題から蝦夷問題への移行は、五世紀末～六世紀初のを節目とすべきであり、大化改新ごろの七世紀あたりまで降らないとし、自説を大幅に修正している。
- (73) 小川真子「アムール下流域の『クイ』に由来する氏族について」『フオクロア』三(ジャバン・パブリッシャーズ、一九七八年)。
- (74) 和田清「支那の記載に現はれたる黒龍江下流域の土人」『東亜学』第一輯(一九三九年)。
- (75) 註(34) 児島前掲論文。
- (76) 浅井亨「蝦夷語のこと」『蝦夷』(社会思想社、一九七九年)。
- (77) 註(34) 菊池前掲論文。
- (78) 註(61)に同じ。
- (79) 註(49)に同じ。
- (80) 註(76)に同じ。
- (81) 註(34) 児島前掲論文。
- (82) 註(2)に同じ。
- (83) 上野秀一「本州文化の受容と農耕文化の成立」『新版古代の日本』第九卷東北・北海道(角川書店、一九九二年)。
- (84) 註(15)に同じ。
- (85) 註(15)に同じ。
- (86) 註(2)に同じ。
- (87) 菊池俊彦「オホーツク文化に見られる鞆鞆・女真系遺物」『北方文化研究』第一〇号(一九七六年)、同「北東アジア古代文化の研究」(北海道大学図書刊行会、一九九五年)。
- (88) 菊池俊彦「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『北方文化研究』第二二号(一九七八年)、及び註(87)一九九五年前掲書。
- (89) 拙稿「樺太アイヌのMummification(ミイラ造り)について」『年報社会科学研究』第二九号(一九八八年)、同「私見オホーツク文化」『年報社会科学研究』第三〇号(一九八九年)「二拙稿ともに岩手県高等学校教育研究会社会部会による」、同「ウファイ考」樺太アイヌのMummificationについての「考察」『北海道考古学』第三二輯(一九九六年)。
- (90) 梶田光明「オホーツクの狩猟民」『新版古代の日本』第九卷東北・北海道(角川書店、一九九二年)。
- (91) 註(90)に同じ。
- (92) 大沼忠春「北海道の古代社会と文化」『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、一九九六年)。
- (93) 石附喜三男「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』第一二輯(一九七六年)、同「考古学からみた『肅慎』」『蝦夷』(社会思想社、一九七九年)「二論文ともに『アイヌ文化の源流』(みやま書房、一九八六年)に再録」。
- (94) 右代啓視「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館年報』第一九号(一九九一年)。
- (95) 鈴木克彦・寺田徳穂「本州初見のオホーツク土器」『北海道考古学』第二九輯(一九九三年)。
- (96) 菊池徹夫「越後平野の北方系土器」『考古学ジャーナル』No・三七一(ニュー・サイエンス社、一九九四年)、同「コメントIV 象の尻尾はつかまえられる」『中世都市十三湊と安藤氏』(新人物往来社、一九九四年)。

- (97) 渡辺仁「アイヌ文化の成立 民族・歴史・考古諸学の合流点」『考古学雑誌』第五八卷第三号（一九七二年）。
- (98) 宇田川洋「イオマンテの考古学」（東京大学出版会、一九八九年）。
- (99) 菊池徹夫「北方考古学の研究」（六興出版、一九八四年）他。
- (100) 註(34) 児島前掲論文。
- (101) 註(55) に同じ。
- (102) 海保嶺夫「中世蝦夷史料」（三一書房、一九八三年）。
- (103) 註(49) に同じ。
- (104) 註(34) 児島前掲論文。
- (105) 註(34) 児島前掲論文。
- (106) 桜田勝徳「エビス」の項『世界大百科事典』（平凡社、一九八一年）。
- (107) 註(39) 一九八七年前掲論文、及び一九九一年前掲書。
- (108) 註(61) に同じ。
- (109) 註(39) 一九七四年前掲書。
- (110) 註(61) に同じ。
- (111) 註(34) 児島前掲論文。
- (112) 註(61) に同じ。
- (113) 註(61) に同じ。
- (114) 註(57) に同じ。
- (115) 伊藤循「古代国家の蝦夷支配」『古代蝦夷の世界と交流』（名著出版、一九九六年）。
- (116) 註(2) 前掲拙稿b。
- (117) 東野治之「付録 天皇号の成立年代について」『正倉院文書と木簡の研究』（塙書房、一九七八年）、鎌田元一「大王の出現」『日本の古代第六巻 王権をめぐる戦い』（中央公論社、一九八六年）。
- (118) 吉村武彦「日本の歴史③ 古代王権の展開」（集英社、一九九一年）。
- (119) 註(117) 東野前掲論文。

- (120) 入間田宣夫「北奥諸郡の建置と延久二年合戦」『北奥古代文化』第二四号（一九九五年）。
- (121) 註(2) 前掲拙稿b。
- (122) 海保嶺夫「擦文文化の文献史的解釈」『物質文化』三八（一九八二年）。
- (123) 註(34) 児島前掲論文。
- (124) 註(2) 前掲拙稿b。
- (125) 註(2) 前掲拙稿b。
- (126) 荒木陽一郎「東北古代史研究講座」『蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題―第三回 十世紀以降の「蝦夷」表記と「俘囚」表記について』『弘前大学国史研究』第八九号（一九九〇年）、註(1) 一九九〇年前掲拙稿、及び註(2) に同じ。
- (127) 註(61) に同じ。
- (128) 註(2) に同じ。
- (129) 註(1) 一九九〇年前掲拙稿、及び註(2) に同じ。
- (130) 註(34) 児島前掲論文。
- (131) 註(61) に同じ。
- (132) 註(57) による。
- (133) 註(36)、及び註(126) 荒木前掲論文を含め、五回にわたって本誌上に掲載された「東北古代史研究講座」による。

（めが・じゅんや 岩手県立博物館学芸員）